

# エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第101号(通巻第161号)  
2013年6月6日発行 発行人:清水武志朗 編集人:  
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山  
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常  
駐していません) e-mail qqh43tdd@train.ocn.ne.jp  
URL http://ecomeetingfama.blog.ocn.ne.jp

## 東京に「市民」発電所を！ 5人がトークバトル

首都圏に自分たちの発電所を！という流れをバックに、5月



150人の観衆のなかで語る5人のゲスト

28日の夜、多摩循環型エネルギー協会主催により、新宿歌舞伎町にあるロフトプラスワンで5人の関係者が「東京に『市民』発電所を！」に関連する話を語り合った。

入場者は老若男女合わせて約150名。60～70代もいれば、20代の男女も少なくないといった感じで、情熱的に、かつ余裕を持ってトークする“出演者”に、これも「なんらかの納得心を得て帰りたい」といった心境のような観客らも、つられるように引き込まれ熱気が上がる。

第一部では、同協会の理事長である桃井和馬さんと事務局局長の高森郁哉さんが、2年前の3.11以降に立ち上がったあと、これまで約2年の多摩エネ協の歩みを説明。

これに対して、一番前の席に陣取っていた発電所建設を志向する男性客から、「多摩市以外にも広げる気があるのか、太陽光パネルの使用後の処分法はどうするのか」といった質問が出た。が、これには多摩電気合同会社の山川陽一代表が、「市の外、三多摩全域まで視野に入れている。パネルの処分法は今後、環境省が指針を出すだろうから、それに従っていく」などと応じていた。

第二部では、阿部裕行多摩市長と世田谷区の保坂展人区長、環境エネルギー政策研究所(ISEP)の古屋将太研究員、ノンフィクションライターの高橋真樹さん、自然エネルギー財団ディレクターの大林ミカさんの5人が登壇。それぞれが自然エネルギーとの関係性を語った。

まず、この夜の集まりに一番関係のある阿部市長。「三多摩は『自由民権運動』の発祥の地。その多摩だから、『自分たちでエネルギーをつくっていこう』という市民主体の運動が起こる土壤があ



一部で多摩の現状を披露する二人

った。行政主導より市民主導でやっているところに意味がある。再生エネ拡大に対応する人材も配置した。今後期待を持っている」と最初の発言。



右から大林、古屋、高橋、阿部、保坂の各氏

保坂区長は、「東京電力以外のPPS(特定規模電気事業者)から、区施設への電力購入を飛躍的に伸ばした。『自然エネルギー活用フォーラム』をつくり、区民が安く太陽光パネルを購入できるようにした。80万円の出費でできてしまうので、4カ月で問い合わせは2000件、このうち見積りまで進んだのが600件。しかし、屋根の問題などで最終的に設置できたのは200件だった。これを分析し、区民に総合的なガイドができるような部署をつくった。

世田谷区と関係のある全国38の自治体に、区と一緒に自然エネの普及に努めていこうと協力をお願いしている。関連する企業の関心も非常に高いものがある」と続けた。

多摩市にも数回足を運んでいる古屋研究員は、関係する兵庫県塚市の例を語った。「市の自然エネルギー推進課が、自然エネをやりたいNPO、技術を持っている人、業者、土地持ちなどを集めて、一つテーブルでワークショップをやった。そういう人たちはふだん接触する機会がないが、それぞれ専門性が高いので、ちょっと場をつくってやれば動き出す。数か月で発電所ができてしまった。場づくりをやって成功した。行政と市民の接点のなかったところが、一つの事業で集中できるようになった。多摩市は世代間の引き継ぎが行われていきそうだ」と。

高橋ライターは、相模原市の災害時にだれでも使える「太陽光充電ステーション」や、電気のきてない石巻市の造船所で、自分で設置した太陽光パネルの電気だけで船をつくっているという例。ミュージシャンが「ソーラー武道館」というライブのプロジェクトで自然エネの啓発を行ったところ、ミュージシャン仲間志向する人間が増えたとのLOHAS系につながる話が紹介された。大林ディレクターは、「ヨーロッパの主流は、分散型の小規模自然エネルギー。ドイツの小さな村では、分野の違う大学教授が集まってプロジェクトを進めている。原発のような、人間が自らコントロールできないようなものをつくってはだめ。小規模・分散型なら自分たちでコントロールできる。人が携わることのできるエネだ」。そして成功する条件としてつぎの4項目を挙げた。

①政策論争の徹底。②知と信頼のネットワークの形成。③地域に適した実効性ある仕組みの構築。④スタッフ、集団の力の蓄積。トークバトルは、夜がふけるにつれてさらに熱を帯びていった。



来場者の質問に答える山川氏

## 東京国体・多摩市炬火イベント行わる

今年の9～10月に開催される東京国体に、多摩市ではサッカー、ハンドボール、スポーツ吹矢の3つの競技が行われるが、この盛り上げに4カ月前も早い5月26日、聖火(炬火)の火をおこす「炬火イベント」が行われた。



マイギリによる火おこしを市民が見守る

会場はパルテノン多摩の大階段前。ここで大きな木製の「マイギリ(舞錐)」と呼ばれる火おこし器が置かれ、これをボーイスカウト、ガールスカウトが二手に分かれて引き合い、そ

の摩擦熱で下部に置かれた火おこし材に点火する。

なにしろ、5月6日に行われた事前の採火では3時間も試行錯誤し、ようやく火がついたというシロモノ。この日もいつ火がつくかはだれにも予想できなかったが、見守る市民も「セーノ! セーノ!」と声をかけて応援。ようやく20~30分後に点火に成功。その瞬間、市民からは一斉に拍手が起った。火はポートランプに移されたが、これが「多摩市国体の火」となる。

これをトーチに移して、ランナーが諏訪にある多摩市陸上競技場まで5中継地点を巡って折り返し、最後にパルテノン多摩まで戻ってくる。この間、約2時間。コース中のランナーは公募で選



ユリート君とキティちゃん

ばれた市民57人。採火式からの第1ランナーは阿部裕行市長だ。炬火が出発したあとは、パルテノンの大ホールで永山高校吹奏楽部の演奏、Rapy's(多摩市/東京都のゆりーとダンスコンテストで優勝)によるゆりーとダンス、カツルミ(多摩市を元気にするイメージソングを歌うシンガーソングライター)ライブなどを楽しんでいるうちに炬火が帰ってくる時間となり、そのお出迎え式という段取り。もう一つの話は、



第1ランナーは阿部市長

地元のサンリオピューロランドのサンリオ社と協定を結び、ハローキティのキティちゃんが、この国体・多摩市版の盛り上げに一役買ってくれることだ。ということは、国体のキャラクターであるゆりーと君とキティちゃんの夢のコラボレーションが実現。これは競技を行う多くの自治体のなかでも、多摩市だけでしか行えないこと。国体版・浦安といったところか。

なお、多摩市での競技は、サッカーは陸上競技場、ハンドボールとスポーツ吹矢は総合体育館が会場となる。サッカー成年男子は9月29日~10月1日、ハンドボール少年男子は10月3日~6日、少年女子は10月4日、スポーツ吹矢は9月21日(一般、ジュニアの各個人戦)。

### 大栗川の緑化工事、東寺方橋先まで伸長

これまで大栗川左岸の護岸緑化工事は、岸边沿いの多摩市シルバー人材センター事務所前まで進んでいたが、その部分も終わり、現在は東寺方橋の先まで伸びている。工事区間の先端は、ちょうど、「大栗川水辺まつり」のいかだ競走の終着点の手前あたり。ということは、今年の水辺まつりには影響がない。

今回の工事は長さ205m、法覆護岸工事1626㎡、擬石平板ブロック設置工事292㎡、植生工事689㎡、植栽工事4本(オオシマザクラ)。工事費用は1億1736万円、これは護岸1mの

工事に約57万2000円かかることになる。工事の完了予定は

7月11日ごろ。発注者はむろん東京都南多摩東部建設事務所(通称・南東建)。



東寺方橋の前後で工事が進む

### 多摩の子どもたちを待つ小菅村の畑

今年も8月の第1週に「多摩川源流体験サマーキャンプ」が山梨県小菅村を中心に行われるが、その最終日に行われるのが「農業体験」。これは農業体験が子どもの教育上にもよい影響があると、文部科学省も推薦しているもので、2年前にも行った。(去年はニジマスやヤマメのつかみ取り、串焼き体験)



動物よけの鉄板で囲った畑

ところが、現地には現地の事情があり、前回は子どもたちの収穫用に植えていたトマトなどの野菜類が、子らが来る前にサルやイノシシなどに食べられてしまった、とのこと。それほど、動物たちの棲む山に近い畑。仕方がないので、その畑の石などを取り払ったあと、畝をつくり、そばの植えつけ方を教わって、その作業を楽しんだ。そして収穫は、動物に食べられなかった自動車が行き交う道路を隔てた先にある畑でジャガイモを掘り起こしたり、ピーマンを切り取ったりの体験を行った。今回は、前回の反省を生かして畑を鉄板で囲い、動物が入れないようにしている。そして、小菅村特産のジャガイモ、トマト、キュウリ、ナスなどを植えつけ、子どもたちの収穫を待つことになっている。こういった配慮を、参加する子たちにもいい聞かせたいものだ。

### 多摩市みらい会議(第二回ESD実践研修会)

表記のESD(持続発展教育)研修会が5月28日、多摩市教育委員会の主催で諏訪5丁目にある多摩市立教育センターで開かれた。

内容は、①学校からのESD実践報告(東寺方小学校主任教諭)飯村真澄先生、②地域からのESD実践報告1)楽農倶楽部代表・新井文夫氏、神津幸夫氏、2)水辺の楽校運営協議会会長・西厚氏、③学校と地域で進めるESDというワークショップを、持続可能な開発のための10年推進会議の森良理事が行った。

西さんは、多摩川/大栗川/乞田川の各河川の自然が残る水辺を通して自然体験、自然学習を実践し、子どもたちの健全育成に努めるよう活動していること。川の生き物観察会、カヌー体験、大栗川水辺まつり、多摩川源流体験キャンプなどのイベントを行って、大勢の児童生徒の参加とともに、保護者にも参加してもらって喜ばれていること。今年1月に子どもたちが主体になって「多摩川子どもシンポジウム」を開いたことなどを報告した。(→研修会:写真・江川さん)

